第1分科会

人権確立をめざす教育の創造

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているか

第1分散会

Ⅰ　はじめに

分科会基調に先立ち、協力者、報告者より自己紹介を行う。引き続き、日程等について説明をする。その後第一分科会の討議課題をもとに①～⑥の討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

Ⅱ　報告及び質疑討論の概要

－報告1－①

「先生は、どうせぼくのこと怒ってるんでしょ！」

～こうたさんが安心して

自分らしくいられるために～

（鹿児島県人教）

－主な質疑と意見－

香川　子どもらがこうたさんに対しての見方が変わったように思うが何がきっかけで様子が変わったのか。また、保護者の変容はあったのか。

報告者　保健室登校の児童に対しこうたさんが「泣いててもくるから強いじゃん」と声をかけていた。その子が教室で「こうたさんはぼくの気持ちを分かってくれる。」と他の児童に対して話し、こうたさんの味方になっていた。そのことがきっかけになっていたと思う。保護者については、家庭的に大変だったので母がこうたさんに強く当たっていたこともあったが、母自身が悩みをだんだん話してくれるようになり、一緒に考えていくようになった。

鹿児島　学校として外部機関とのつながりはつくっていたのか。また、本人が納得していないが、あおぞら学級にいることをどのように説明したのか。

報告者　福祉課とつながってケース会議などをしていた。本人にどう説明したのかはわからないが、母は丁寧に指導してもらえると聞いて支援学級に入ることにしたと聞いている。

鹿児島　母自身が相談できる場のようなところがあるのか気になった。こうたさんが「行きたくない」の理由を丁寧に話していかないといけないと感じた。

福岡　就学前の施設（保育園など）での様子は。福岡では就学前の施設では小学校の準備をしていて自尊感情がすでにボロボロになっている子がいる。鹿児島では保幼小の連携はどのような実態があるのか。また、スクールカウンセラーはいるのか。

鹿児島　自分の学校では2月くらいに保育園の先生方から状況を聞く。週に1回スクールソーシャルワーカーが来校しこうたさんの母ともつながっている。

愛媛　みんなの共感があったからこうたさんがみんなと勉強したい！という姿につながったのだと思う。「ひらく」「おしえてどうしたの？」などの教材選択の理由は。学校の年間計画にあったのか。また、他に実践した教材があれば教えてほしい。

報告者　学校のカリキュラムにはなく自分でやりたいと思った。セクシュアリティやジェーンダーに関わる教材や子どもの作文から学習へつないだり、鹿児島県同教が作成した冊子から学年や児童の実態に合わせて取り組んだりしている。

福岡　学級から飛び出す児童がいたときに、他の児童の学習の保障をどのように行うか。また、「いつになったらもどれるの」と本人が言っているが学校での就学の判定会議について継続か転籍かなど特別支援学級との教員と話ができているのか。

報告者　支援員がこうたさんに対応したり、自分が学級の児童に「呼んでくるからここをして待っててね」と伝えたりしている。支援学級について来年どうするかは保護者と今後相談して決めると思う。

滋賀　困ったときに相談したときの同僚の先生とのやり取りの中で葛藤したことはないか。

報告者　支援学級の先生に任せたほうがよいのではないか、交流学級で過ごすならみんなと同じルールを守らせてほしい、などの意見もあった。自分も迷いがあったが支援学級の先生が自分と同じ方向性だったのがよかった。

滋賀　自分が受け持っていた時のことを思い出し、特別扱いせず、自分のクラスの子やと思って接したことがクラスの児童にも伝わっていたと思う。その時の気持ちと同じじゃないかなと思って聞いていた。

－報告2－④

「ちょっと描いてみる」

～A さんから学んだこと～

（滋賀県人教）

－主な質疑と意見－

鹿児島　A さんをどうして中心にすえたのか。また、この報告がどのような仲間で作られていったのか。「描きたくない」が「できない」に変わったことに気づく感性は自分で気づいたのか日々の仲間との関係の中で育まれていったものなのか。

報告者　引継ぎを受けたときに幼稚園に3年間で6日しか行けていないことなどを知り、まずは学校に楽しく来られるようにしたいという思いがあった。

まず校内で話をし、草津市人教、滋賀県人教で話をしたりした。A さんの言葉に対して「何でそう言ったのかな？」理由があるのではないかと思った。

鳥取　ありのままをさらけだすのは大事だと思う。言いにくい、言えないというありのままの自分、弱い自分を隠したり、かっこ悪いことは隠したりすることもありのままではないか。「ありのまま」をどう考えているか。

報告者　一年目の頃はかっこいいところを見せようとしていたが、できないことをできるように見せることをしんどいと感じていた。子どもの前で間違えることも多いが「間違えても大丈夫やな」という雰囲気が子どもたちと共有できている。間違えてもいいんだという仲間・集団づくりを大事にしていきたい。

香川　子どもたちのAさんへの声かけがあたたかいと感じた。きっかけや授業での取り組みがあったのか。

鹿児島　とてもあたたかい気持ちになる報告だった。「Aさんを見守ってあげて」という言葉が気になった。対等な関係が築けているとしたらどんな仲間づくりをされているのか。自分のクラスでは支援級の子だから言わないということがある。

報告者　学校全体として月1回道徳の時間の重点教材を決めて仲間づくりやいじめについて学級で話し合ったり、月1回の人権の日があり学年の発表や人権の歌を作ったりしている。学校全体で仲間を大切にしようという雰囲気をつくっていることがつながっているのではないかと思う。

　周りの子がAさんのことを少し下に見ていることはあるかもしれない。世話やきの子が手伝うことが多い。毎日休み時間に外にでて遊びを通して子どもたちの関係づくりができていったのではないか。図工の時間にAさんに声をかけた子は普段はAさんとかかわりの薄い子で自分から友だちに声をかけるような子ではなかった。友だちが自分の作品を認めてくれたことがAさんの自信につながっていったと思う。

協力者　教師の何気ない言葉かけや子どもに対する見方がもし間違っていたとしたら、それがかかわり方に表れてくる。周りの子どもたちはよくみていて教師のかかわり方から、「そういうかかわり方でいいんだ」という雰囲気が学級で流れると位置づけられる恐ろしさがある。教師が日々問い続け、学び続けなくてはいけない。

福岡　学級集団づくりは手法ではない。先生の生き方が子どもたちにしみこんでいくのだと思う。人権意識・感覚は自分の中でどのように育ってきたのか。

鹿児島　弱さの共有、痛みの共有をできることは大切だと3年目で言えるのはすごい。どういうところから育つのか。

福岡　逃げないということが大事だと思った。自分は逃げ方を覚えてきたように思う。先生を育てたものを知りたい。

報告者　現在の学校に赴任するまでは同和、被差別部落の話は詳しくなかった。しかし放課後に地区の方と話しをしていく中でもっと話を聞きたいと思った。部落問題学習や地域の合宿に参加する中で心にのこったことが「知らないことは怖いこと」知るということが大事。子どものことも同じで思いを知ることを大事にしていきたい。もし自分が子どもだったらこの言葉をどう感じるかな、親しみがもてるんじゃないかなというのが自然と弱みをだすことになっているのではないかと思う。

―総括討論―

報告者（鹿児島）　支援学級、交流学級を分ける流れがある。取り組みをすればするほど感じる。他県の現状はどうなっているのか。

滋賀　過去に在籍移動にかかわった。子どもがのびのびしていて保護者もよかったと言っていることに自分は深く考えずによかったなと思っていた。支援学級へ前向きに入りたいという子が増えてきている。そこに抵抗を感じない自分がいた。しかしよく考えると、交流学級の居心地が悪く自分の居場所が作りにくい現状があるからこそなのかもしれない。そういう学級を自分が作っていたのではないか。一方で特別支援教育に携わっている先生からはできるだけ早いタイミングで就学援助したほうが自己肯定感が育つという面もあると聞く。それでも人権教育を大切にしたいという思いもある。分けて考えているのは誰なのか。結局矢印は自分に向いているなと感じている。

徳島　障がい者の立場から発言したい。自分の子ども時代は重度障がい者は地元の小学校は受け入れてくれなかった。養護学校での寮生活を送り社会人になって気が付いたのは近所に友だちが一人もいないということ。災害の時に近所にどんな人がいるのかわかってもらうためにも地域との連携が必要。一方で特別支援学校のメリットもある。地元の学校と支援学校の二重籍を社会制度として進めるということも行われている。

福岡　昔は「地域の子が地域の学校で」と働きかけて重度の障がい害がある子でも地域の学校にきていた。いろんな子がいて当たり前だった。現状は通常の学級には重度の障がい害がある子は入ってこない。子どもたちには一緒にと言っているのに分けている。発達障がい害の子が増えているのではない。乳幼児期からの学び（たくさんの遊び）の中で発達できないまま就学の際に支援学級を勧められている。保・幼の段階で居場所がなかったり学びが保障されてない子に対して小学校に入ってきたときにそこに変わる学びを保障していかなくてはいけない。 時間がないことを理由にせず考えて工夫してできることを一つずつ進めていきたい。

―日目のまとめ―

支援学級と交流学級を分ける流れがある。インクル

ーシブ教育とは逆行している。支援学校に籍をおくことで、よかったと思うこと（自身の力が伸びる、自己肯定感が育つ）と、課題（地域につながりがなく、共に暮らす仲間がいないこと）が提起された。また教室では、支援の必要な子どもが教室に入れない、学習できないという課題と向き合う中で、誰もが参加・学習できる授業づくり・教材づくりについてご意見をいただいた。学校が全ての子どもにとって、自己実現できる場所にしていくことがこれから必要なのではないかということを共有した。

－報告3－②

命をつなぐために

～地域の体験を通して～

（徳島県人教）

－主な質疑と意見－

大阪　二次避難ではどのようなことをするのか。どうして遅れてしまったのか。また元気っこタイムと防災との関係について教えてほしい。

報告者　二次避難は園の近くの防災公園に避難する。0～5歳児まで在園し、2歳からは自分の足で避難する。2歳児は早く歩けないことから遅れてしまう。高いところにいち早く逃げるための体つくりや異年齢との交流にもつながっている。

福岡　防災と被差別部落のつながりについて同和教育の歴史などもっと詳しく聞きたい。

徳島　阿南は被差別部落が多い。河川が多く厳しい環境にあった。学習会などで阿南市独自の人権教育を行っている。部落の子にというよりは、すべての子どもたちを育てて交流をする。自分ごととして捉えるような場をつくってきた。

鹿児島　人が少なく一人暮らし高齢者が多い地域に住んでいる。学校や保育園にいるときだけでなく夜や学校にいないときに避難するとき、誰がどこに住んでいるのかが分かるとよい。地域の人が保育園の子や顔や名前が分かるなど人間関係づくりを阿南市ではどのように取り組んでいるのか。

報告者　民生委員や自治会の助けでどこに誰が住んでいるのかすべてではないがわかる。子どもセンターではコロナ前は一人暮らしの高齢者にプレゼントを渡す機会があった。また、園が道路に面していて散歩中の方などと子どもたちのやりとりがある。

大阪　命の大切さに気付き守ろうとするということが印象に残った。火事が「こわい」だけにとらわれてしまうことがあるのでは。戦争なども「怖い」だけでなく命の大切さにつなげないといけないと考えるが難しい現状がある。命の大切さを感じるために取り組んでいることがあれば教えてほしい。

報告者　こわいという気持ちを安心させる声かけを心がけている。友だちとのかかわりや自分が大切にされている、という思いをもつことが命の大切さにつながっていると思う。

－報告4－③

何度も、何度も。あきらめずに。

～おとなも子どもも「我武者羅」に

駆け抜けた3年間～

（大阪市人教）

－主な質疑と意見－

鳥取　サークル活動について詳しく聞きたい。朝鮮文化研究会が国際文化研究会と統合されていないのはなぜか。また、ノゾミさんについてどのような社会的背景があるのか。

報告者　毎週水曜日、部活のように活動しているが全員参加ではなく希望制。朝鮮文化研究会は韓国・朝鮮にルーツのある生徒が参加でき、国際文化研究会はルーツのあるなしに関係なく参加できる。ノゾミさんについて被差別部落にルーツがある生徒で、祖母が安く朝ごはんを提供する地域の朝ごはんやさんをやっている。（補足）クラブ清掃時間の間に、サークル活動をできるようにして、クラブとサークルを両立できるような学校の動きを作っている。

徳島　日本語指導教室の張り紙があるのを見た。各サークルと日本語センター校と関わりについては？

報告者　日本語センター校設置は2年前で、地域の他の学校の生徒も参加している。サークルとはつながりはないが、交流を企画している。

大阪　ミニテストにどのように取り組んだのか。また、ノゾミさんがどうして教室から抜け出すことが多いのかについて詳しく知りたい。

報告者　学力のしんどい状況があった。高校入試に向けて、進路の幅を広げるための取り組み。進学先でやり抜く力や教えあいを通して、わからないことをわからないと言える力をつけてほしいと思い始めた。みんなが満点とれるような方法を考え、班の子同士で教え合い、かかわりをつくるために工夫した。

ノゾミさんは小学校3年生から6年生の間ほとんど学校に入れなかったので勉強が分からない苦しさがあった。それ以外に友人関係、家庭関係、くらしのしんどさがやる気をうばっていた。班ノートで家庭のしんどさや自分のしんどいことをクラスの子に共有していた。周りの子はノゾミさんがしんどいことも分かっているので一緒に頑張ろうという雰囲気だった。

石川　自分の勤める学校にもいるリストカットなどする子どもに対して、どう関わっていけばいいのか。どこまで頑張らせたらよいかは難しい。

報告者　カウンセラーにつないだり保護者に伝えたり病院を受診したがあまり変化はなかった。友だちの支えがあった。自分自身答えは見つからず3年間を送った。高校進学後も元担任に話をしに中学校へきている。一人で頑張れるようにとは伝えたが、周りに相談する、頼ることで次に進める力をつ

けたいと思いながらかかわっていた。
大阪　頑張れって言いにくいことがある。ノゾミさんの背負わされているしんどさを考えていかなくてはいけない。この子と出会ったことで先生が考えたことや変わったこと、学校や周りの子が変容したことはあるか。
報告者　息抜きの時間や休んだときもあったが必ず声をかけてほしいと伝えた。その時の本人の状況をみて声をかけた。周りの子はノゾミのことを理解した上で、学級、学校が頑張れる居場所となるよう協力していた。教室を飛び出すなどの行動の裏に家庭や社会背景がある。どの子にもその背景があるということを考えていきたい。

－総括討論－
鹿児島　教師主導になっていないか。どんな背景があっても生きづらさがあっても生きていく。安心できる社会を作ることが目的ではないか。子どもの力を引き出すための教育とは。サークルの子どもたちがそういう社会を作る力を持って羽ばたいているのか。これはシステムだけではない、私たち一人一人の考え方や動きがある。子どもたちが人とつながれる力を持つことができているのか。それをどうやって作るのかを知りたい。
大阪　不登校の子について何とか学校に戻そうとやっていたが、今はフリースクールなどで出席扱いにできる。大切なのはその子の居場所はどこなのかということではないか。学校に戻すことは必要か。見守るということも必要ではないか。また、小学校との連携と早い段階での各機関とのつながりづくりやたくさんの人が見たことを集約していくことが大切ではないか。
鳥取　色々な子どもがいて、その子どもに原因があると捉えることもあるが、社会背景を見ていないことも多い。部落問題などがかかわっていないかなどの視点を意識することで、社会課題や子どもの背景が見えてくるのではないだろうか。
大阪　過去の経験では学校は荒れていたけど今より不登校は多くなかった。先輩に非行は宝と言われた。中学の発表にあった「不思議な空気感」について自分もそう感じている。悲鳴をあげる子どもがいるのに、学校は荒れていない。その違和感にどう向き合っていくのか。校則を変えたいという子どもたちは議論がしたいのに自分の意見が打ち切られてしまう学校の現状がある。自分たちが取り組みの中で実感が伴わないと子どもに社会を変えていく力は育たないのではと感じている。卒業式の練習の時に間が空いている子どもの部分を詰めさせようとしたら「ずっと休んどるけどここにはAがおるねん」と子どもから言われた。声をあげられる学校になっているのか、雰囲気か、自分の声で学校を創っていけるのかが自分自身にも問われている。
協力者　一見静かで落ち着いていることに安心していないか。荒れは「我慢」として内在しているのではないか。見ようとしないと見えてこない。学校が子どもたちにとって行きたい場所、安心できる居心地のよい場所になっているのかを考えていかなくてはいけない。
大分　限られた時間しか人権学習がない。この二日間を通して人権意識を大事にして、差別の現実から学ぶことを始めたいと思った。誰かのことではなく自分ごととして考え語り合っていきたい。これまでの学びを思い出しながら、差別について、働きかけることができる子どもを育てていきたい。私たちの子どもを見る視点を改めて見つめ直したい。
滋賀　一番大事にしなくてはいけないのは命を守ることだと思う。発表に「頑張る」ということがあったが自分は失敗したことがある。引き継ぎを受けていた子が真逆の姿を見せていた。頑張っていた子どもに「がんばれ」と声をかけていた。子どもの現状を見れていなかった。
同和教育について地区があるかどうかではない、地区があるからできるわけではなく、どこでもしていくことが大切。自分が差別と向き合う一歩を踏み出さない限り、何も変わらないのではないか。差別があるって感じているかな、差別に腹が立っているかなと人権感覚を磨いていきたい。命を大事にするためにも、仲間を育てていくことで社会を変えてきたい。

－2日間のまとめ－
「いろいろな子どもがいて、その子どもに原因があると捉えることもあるが、社会背景を見ていないことも多い。背景を意識することで、社会課題や子どもの背景が見えてくるのではないだろうか？」という意見について、どの報告者も真摯に子どもと向き合っていることは大きな成果として確認できた。しかし、教育現場においてはまだまだ子どもや保護者に課題意識を向ける現状がある。教員の多忙化で時間に追われ、できない理由を探してしまいがちだが、制度にそのまま従うのではなく、制度や当たり前を問い直し、学びを止めないことを大切にしていきたいと参加者と共有することができた。また、防災でも、差別であっても、どんなことにおいても命を守ることがとても大事なことだという意見を重ねることができた。
　一方で人権、同和教育が軽くなっていないかという指摘があった。改めてこの意見を大切に新たな実践を作らなければと会場で確かめることができた。